

北条政子は本当に悪女だったのか？

(日本三大悪女：北条政子、日野富子、淀殿)

2022年8月25日

我部山 民樹

1. はじめに

大河ドラマを見ていて、北条政子が日本三大悪女の一人と知り、それまで「嫉妬深くて個性の強い人柄であるが、頼朝の偉業を助け、幕府の礎を築くことに貢献し、頼朝亡き後も鎌倉幕府を率いたしっかり者の女性」と漠然と思っていたので、驚いた。三人をいつだれがどのような悪女の定義に決めたのだろうか？

まずは「悪女」（あくじょ）のイメージは、男性を魅了して金品を巻き上げるとか、女を武器にして男を凋落して思いのままにあやつるとか、ライバルを無実の罪で陥れ次々と排除してしまうような「恐ろしい女性」である。しかし、辞典によると、意外にも悪女の定義は「①容貌の醜い女②性質の良くない女③男を魅了し、墮落させるような小悪魔的な女性。男を手玉に取る女」とある。そして「日本三大悪女」と言えば、昔から「北条政子」（ほうじょうまさこ）、「日野富子」（ひのとみこ）、「淀殿（茶々）」（よどどの）と言われていることを知る。別資料によると『歴史的な意味での悪女というと、世界で一致してくる。共通しているのは富と権力を持ち、己の欲望のために多くの人間を苦しめ、国1つの歴史を大きく動かした女性』とある。この定義からすれば、違和感がある。

『「日本三大悪女」を昔から、北条政子、日野富子、淀殿に決まっている。』となっているが、いつ、誰が、何を基準に決めたのだろうか？

また、別資料によると『「歴史的な世界三大悪女は中国の①呂雉（りょち）②西太后（せいたいごう）の絶対的2強に加え、3番目はイギリスのマリー・アントワネット」との説を唱える歴史家もいるが、候補者が多すぎて、歴史家の中では一致を見ていないようだ。

悪女のイメージを理解するために、まずは日本と世界の三大悪女の素顔を虚実取り混ぜてまとめてみる。のちの世に悪女を強調するために潤色や曲筆、あるいは創作があることは想定されるので、解釈の上ではそのことを当然考慮しなければならないだろう。

2. 歴史的悪女とされる女性について

史料が十分ではないので素顔が分かりにくいですが、後世ささやかれていることも含めて虚実取り混ぜて、その姿をまとめる。

2-1. 日本

歴史的悪女は「富と権力を持つ」とあるので、時の最高権力者の正室、側室、または愛人以上が該当すると思われるので、3人ともに当てはまる。果たして彼女たちは最高権力者を操って、あるいは最高権力者として権力を駆使したのだろうか？己の欲望のために多くの人間を苦しめ、ライバルの後継者候補を不当に遠ざけ、あるいは亡き者にして、政権や国家を危うくさせたのだろうか？

② 三人の人物像

○北条政子

1157年（保元2年）生まれ。伊豆（現在の静岡県伊豆市）の小土豪・北条時政（ほうじょうときまさ）の娘で、鎌倉幕府初代将軍「源頼朝」の正室。

長男は2代将軍「源頼家」（みなもとのよりいえ）、次男は3代将軍「源実朝」（みなもとのさねとも）。夫も息子も「鎌倉幕府将軍」となる。政子はまさに勝組の女性であるが、夫と4人（長男・頼家、次男・実朝、長女・大姫、次女）すべての子どもに先立たれてしまった悲劇の女性でもある。

政子は、頼朝の遠縁・「藤原頼経」（ふじわらのよりつね）（九条頼経、両親ともが源頼朝の同母妹・坊門姫の孫）を第4代将軍に招致して後見し、実家の北条家を執権（将軍を補佐し、政務を統轄した最高の職）とし、実質上の将軍として権力を握り続けた。俗に「尼将軍」（あましょうぐん、頼朝亡き後、出家し、尼御台所と呼ばれていた。）と呼ばれる。

一方「政子の実の子や孫が抹殺されて源氏本流が断絶したが、その背景に北条氏の暗躍があったことは疑問の余地が無いとされている。北条一族の政子が暗躍に無関係であったはずは無いが、一体どの程度関与したのだろうか。積極的に

関与したのでないかとの疑念を持たれているので、悪女の烙印を押されているようだ。

○日野富子

1140年生まれ。公家の名門・日野家の娘で、室町幕府8代将軍「足利義政」（あしかがよしまさ）の正室。富子はあいついで女子を産むが、なかなか男子に恵まれなかった。

足利義政は側室との間にも男子に恵まれなかったので、弟・「足利義視」（あしかがよしみ）を還俗（げんぞく、僧侶になった者が、戒律を堅持する僧侶であることを捨て、在俗者・俗人に戻る事をいう。）させて後継者としたが、その直後に日野富子が「足利義尚」（あしかがよしひさ）を懐妊する。

日野富子が我が子の将軍就任に執着し、四職（ししき、侍所の長官）・「山名宗全」（やまなそうぜん）と手を結んだことにより、足利義視は管領（かんれい、将軍を補佐し政務全体を管理）・「細川勝元」（ほそかわかつもと）と手を結ぶことになる。そうして1467年に将軍継承者を争う「応仁の乱」が勃発する。

その結果、1473年、9代将軍・足利義尚が誕生する。応仁の乱は約11年間続き1477年に終結するが、結果的には京都の街は荒れ果て、将軍の権威は失墜してしまう。日野富子は戦乱で苦しむ庶民をよそに巨万の富を築いて「財産を蓄え続けたとして批判を浴びる。両軍の大名に多額の金銭を貸し付け、また米の投機も行うなどして、一時は現在の価値にして60億円もの資産があったとされる。

我が子・義尚が25歳で病死すると、政子は義視と自分の妹・良子の間に生まれた足利義材（あしかがよしき、後の義植）を将軍に擁立するよう夫・義政と協議し、同年4月に合意が行われた。1490年正月に義政が没すると、義材が10代将軍となった。しかし後見人となった義視は権力を持ち続ける富子と争い、富子の邸宅小河邸を破壊し、領地を差し押さえた。翌年の義視の死後、親政を開始した義材もまた富子と敵対した。

1493年、義材が河内に出征している間に富子は細川政元と共にクーデターを起こして義材を廃し、義政の甥で堀越公方（伊豆堀越にあった室町幕府の東国支配機関）・足利政知の子・義澄（よしずみ）を11代将軍に就けた（明応の政変）。その3年後、1496年に富子は57歳で死去した。

自らの権力を持ち続けるために我が子の将軍就任に執着し、11年間に及ぶ応仁の乱を引き起こし、あげく将軍の権威を失墜させたとすれば悪女の条件を満たしていることになる。

○淀殿（茶々、ちゃちゃ）

1567年（永禄10年）生まれ。

天下人・豊臣秀吉に溺愛された女性。天下一の美女とうたわれた織田信長の妹・お市と戦国武将・浅井長政（あざいながまさ）の長女で、豊臣秀頼の生母。父と兄を叔父・信長との戦いで失い、母・お市とその再婚相手の柴田勝家を秀吉との戦いで亡くした後、淀殿は秀吉の側室になったという波乱万丈の生涯を送った。秀吉の愛情を一身に受けたとか、秀頼の後見人となって政治に介入し、結果、豊臣家の断絶に繋がったとかによって「悪女」呼ばわりされるのだが、見方を変えれば秀吉の死後も豊臣家を守り続けようとして懸命に生き抜いた女性とも言える。

正室・「ねね」（北政所）が子宝に恵まれなかったことから、側室であるにもかかわらず、「御台所」（みだいどころ）と呼ばれ、権勢を振るった。しかし、当時より秀頼が秀吉の実子でないと疑われ、あるいは実子ではないと信じこまれたようだ。宣教師・ルイス・フロイスは秀頼の兄・鶴松についても実子を否定した記録に残している。（*1）秀頼の本当の父親をめぐって、淀殿は江戸時代になって太閤記や軍記等で淫乱女とかのひどい扱いを受け、とんでもない女性になり果てた。それらはフィクションもあり、いちいち取り上げるまでもないが、現在でもその余韻が残っているようだ。

*1.

ルイス・フロイスによると、「鶴松（秀頼の兄）は秀吉の子供でないと密かに信じていること、淀殿（茶々）の懐妊は笑うべきこと、また秀吉の子供であると信じる者もいなかった」と表記している。当然、秀頼に対しても思いは同じであろう。

ルイス・フロイス；ポルトガルのカトリック司祭、宣教師。イエズス会士として戦国時の日本で宣教し、織田信長や豊臣秀吉らと会見。戦国時代研究の貴重な資料となる『日本史』を記したことで有名。

③三人の性格と悪女とされた要因

	北条政子	日野富子	淀殿
--	------	------	----

身分	鎌倉幕府征夷大將軍・源頼朝の正室	室町幕府第 8 代將軍・足利義政の正室	太閤殿下秀吉の側室
性格	<ul style="list-style-type: none"> ・気が強い女性で、周囲の言いなりにならなかったエピソードがいくつも残っている。 ・嫉妬深い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・夫・義政の側室 4 人を追放したかなり嫉妬深い女性 ・最期まで権力を持ち続けようとした相当気の強い女性 	<ul style="list-style-type: none"> ・勝ち気で気位が高く、ヒステリックであったと言われている。 ・心優しい性格であったとも言われている。 ・世間知らずと云われている。
悪女とされる要因	<ul style="list-style-type: none"> ・頼朝の浮気相手の「亀の前」の住んでいた屋敷を打ちこわし、さらにその女性を追いやってしまう。 また源頼朝が他の女性と接することを好まず、結果的に後継者不足となる。 ・1193 年、曾我兄弟仇討ち事件(*1)がきっかけとなり、北条政子は頼朝の弟・源範頼に謀叛の疑いがあると源頼朝に讒言する。源範頼は頼朝に臣従をしていたが、猜疑心の強い源頼朝に審議を受け、結果、源範頼は殺されてしまう。 ・政子の実子・頼家が 2 代將軍になった 	<ul style="list-style-type: none"> ・義政は世継ぎがなかなか生まれなかったため、僧侶になっていた義政の弟・義視(よしみ)を呼び戻したが、翌年に富子が男の子を生んだ。我が子の將軍就任に固執したので、富子は義視が邪魔になってしまう。このゴタゴタから、京都を焼き尽くした 10 年間にも及ぶ「応仁の乱」が巻き起こった。 ・乱の最中も、日野富子は私財を蓄え続けて、批判を浴びる。 ・我が子の 9 代將軍義尚が死去した後、將軍の去就に深く関わったことも、彼女が悪女と呼ばれる一因となっている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・大阪の陣で徳川家康に抵抗したことで、結果、豊臣家を滅亡に導いたと言われること ・これまで実子(*2)のいなかった秀吉の子供を身ごもった事から、石田三成や大野治長との不義の噂が当時から流布していたこと

が、将軍就任後は北条家よりも妻妾・若狭局（正室不詳）の実家・比企家を重視。これに対して北条家は1203年に北条政子の名で比企家を討伐。さらに頼家は政子により出家を命じられ将軍の座を追われ、幽閉された。あげくに、最後は暗殺された。頼家は不肖の息子で鎌倉幕府を束ねていく力はなく、さらには母の実家である北条家も軽視をした。

頼家が排除される理由はいくつもあったようだが、政子は息子・頼家を守ることなく死に追いやったとみられている。

・実子の3代将軍実朝が暗殺され、母である北条政子が実質的な統治者となり「尼将軍」と言われるようになる。実朝暗殺の関与が疑われる。

・1221年、承久の乱（後鳥羽上皇が再び

	<p>上皇中心の政治を取り戻すべく、鎌倉幕府を討ち滅ぼそうとして起こした戦)に勝利して、北条政子は、敵対した後鳥羽上皇を隠岐の島へ流罪にする。時の上皇を流罪に追い込んだので、後世まで批判を受けることになった。</p>		
<p>良いところ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・夫・頼朝の弟である義経の愛妾・静御前とその子を庇うなど、とても愛情深いエピソードがある。 ・家中のいざこざの仲裁をしたり、後には将軍の代行を務めたりと、必死に夫・頼朝の創設した鎌倉幕府を守ろうとした、芯の強い女性。 	<ul style="list-style-type: none"> ・日野富子の行動の背景には、一貫して幕府を守る、という意志が働いていた。義政が十分に政治手腕を発揮できない状況にあったことが、そもそもの発端となっているのかもしれない。 ・息子・義尚は23歳という若さでこの世を去る。その最後は酒におぼれ、重い病に罹っていた。その後、夫・義政も亡くなる。二人の死後も、幕府の運営や人事に発言力を持ち、幕府の屋台骨を支えた。悲運にありながらも夫と息子のために必死に生きた女性の姿も見えてくる。 	<p>秀吉の死後も豊臣家を守り続けようとして懸命に生き抜いた女性。</p>

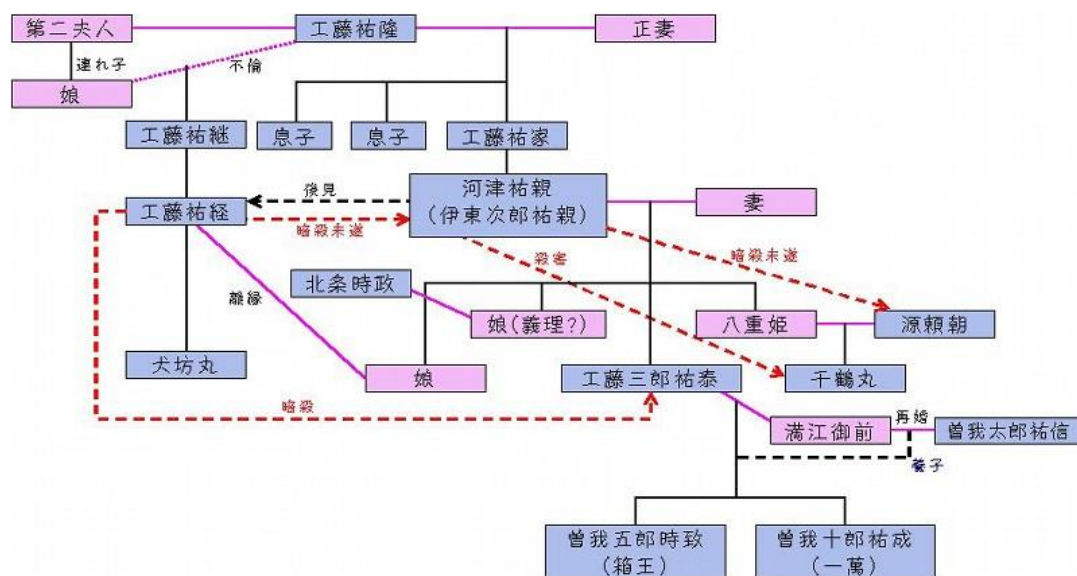
*1. 曾我兄弟の仇討ち事件

赤穂浪士の討ち入りと伊賀越えの仇討ちに並ぶ、日本三大仇討ちの1つである。

建久4年(1193年)に源頼朝が富士の裾野で行った大規模な巻狩り(富士の巻狩り)の際、現在の富士宮市上井出の地で、兄・曾我十郎祐成(すけなり)と弟・五郎時致(ときむね)が父の仇である工藤祐経(すけつね、頼朝の寵臣)を討ち果たした。仇討ち成就後、兄弟は御家人と戦闘になり、兄は討ち取られたが、弟・時致は将軍頼朝を目掛けて走り、頼朝はこれを迎え討とうと刀を取ったが、御家人・大友能直がこれを押し留めた。この間に弟・時致は取り押さえられ、大見小平次が預かることで事態が落ち着くこととなった。

事件の発端は、伊豆にある工藤祐経(すけつね)の領地をめぐる、工藤祐経と曾我兄弟(伊藤祐泰の子、曾我家に養子に出された)の祖父・伊東祐親(すけちか)の所領争いに始まる。領地を奪われた工藤祐経が伊東祐親を暗殺しようとしたが、かなわなかった。が、近くにいた伊東祐親の嫡子・伊東祐泰(すけやす、曾我兄弟の父)を誤って殺してしまうとある。(領地奪還の為なら、始めから伊藤祐親・祐泰親子を暗殺するつもりだった可能性もある。)当時幼かった曾我兄弟(母親が兄弟を連れて再婚)は静かに闘志を燃やしながら成長し、兄・十郎が22歳、弟・五郎が20歳の時、仇討ちを遂げた。兄・十郎は討たれ、弟・五郎は捕縛されて鎌倉へ護送される途中、鷹ヶ岡で首を刎ねられた。この鷹ヶ岡が、現在の富士市鷹岡の地であるといわれ、兄弟にまつわる史跡がこの地に数多く残されている。

曾我兄弟の家系図



*2. 秀吉の長浜城主時代の実子

秀吉が長浜城主時代に側室「南殿」に男児・石松丸と女児ができて、いずれも早世したとされる。南殿は子供に先立たれた後、竹生島・宝巖寺に出家したとされる。

南殿との間に子宝に恵まれていたのであれば、秀吉が簡単に手放したのは疑問が残る。

南殿の子については養子説とかの非実子説も根強く残っていて、様々な憶測や流言が現代まで残っている。

2—2. 世界

世界三大悪女は、中国の呂雉（呂后）、中国の西太后、フランス王ルイ 16 世の王妃・マリー・アントワネットとの説が有るが、異論はいろいろあるようだ。見る角度により見解が異なり、諸説が沸き起こるのだろう。

三人の人物像と悪女とされた要因をまとめる。

○呂雉（呂后）

漢の高祖・劉邦（在位：前 202～195 年）の皇后。呂後の治世に関して司馬遷は「天下は安定していて、刑罰を用いることはまれで罪人も少なく、民は農事に励み、衣食は豊かになった」と評価する一方で「性格は残忍で猜疑心が強く、息子が亡くなっても悲しまず、天下を私し、功臣や王族を陰謀により陥れて残酷に族滅（一族を一人残らず殺し滅ぼす）し、無能卑賤な呂氏一族を要職に就けた。その悪逆非道は世に隠れも無い」と非難した。

○西太后

元々、清の第 8 代皇帝・咸豊帝（かんぽうてい、在位：1850～1861 年）の第 2 夫人だったが、男子（のちの同治帝）を産んでから西太后とよばれた。

・咸豊帝に愛されていた麗妃（れいひ、側妃）の莊静皇貴妃（そうせいこうきひ）に嫉妬した西太后は帝の死後、麗妃の手足を切断し、生かしたまま、瓶に入れた。（のちの世の創作説もある）

・自分の息子である第 10 代皇帝・同治帝が西太后の命令に服さないのを暗殺した。

・同治帝の身重の后を紫禁城内の京劇の舞台上に吊り上げ、落として殺した。

・死期を悟った西太后は自分の死の一日前に、よく思っていなかった甥の第11代皇帝光緒帝を毒殺した。

○マリー・アントワネット

フランス王ルイ16世（1754～1792年）の王妃。ハクスブルック家出身で母親はオーストリアの女大公であり、ハンガリー女王のマリアテレジア。

フランス革命で、国民のヘイトの対象になりギロチンにかけられた。

ヘイトされた要因を列記する。

・王妃自らベルサイユの宮廷の模範とならなければいけない立場の中でそれを逸脱した行為や言動により、保守的な貴族を中心に大きな抵抗勢力が宮廷内に形成されるようになった。

・浪費家で市民の生活に疎く、思慮が浅く派手好きで遊ぶことに熱中していたイメージが強い

・派手な服や髪型の追求、観劇や舞踏会などにばかり熱心で公務にはあまり力を入れない。それに心を痛めた母親・マリアテレジアが忠告の手紙を送ったほど。

これには異論が噴出するだろう。マリー・アントワネットは個人的には意外に思われる。賢くなく、世間知らずなだけのような面があり、とくに調べたわけでは無いが、もっと比較にならないほどの悪女がうようよしているように思われる。

3. 果たして北条政子は歴史的な大悪女なのか

長男・頼家を幽閉し、暗殺を黙認したと思われる政子は暗い面もあるが、親の反対を押し切って頼朝と結婚した情熱的な面がある。それに3代将軍・実朝が暗殺されて、混乱していた御家人に対して朝廷側が義時を討つように命令した。当時の武士にとって朝廷とは絶対的な存在であり、幕府に恩義があるとは言え、朝廷に逆らいつらい命令だった。幕府と朝廷の板挟みになった御家人に対して、北条政子は次ぎのような呼びかけをした。

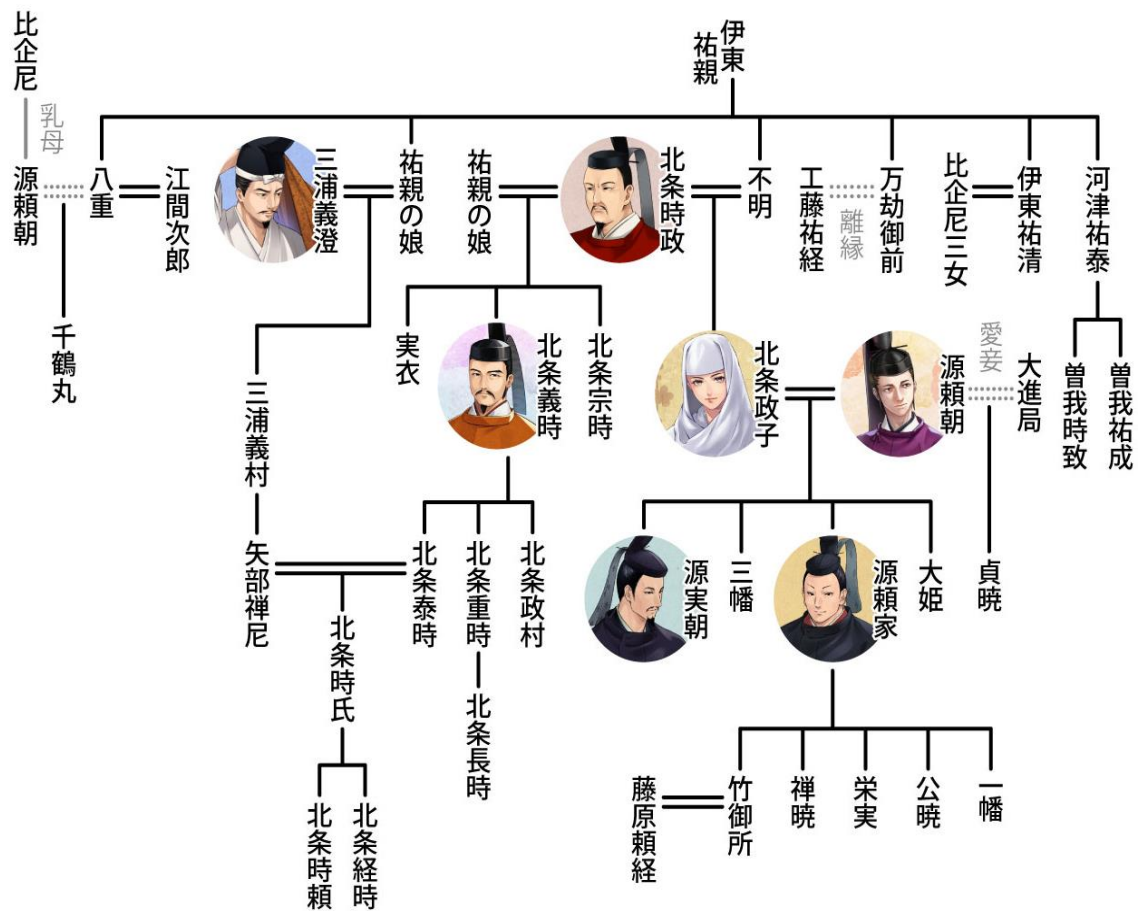
「頼朝公から受けた恩は、山よりも高く海よりも深い。悪いのは、上皇ではなく上皇をそそのかす周りの人たちです。将軍が残したこの幕府を守り抜きましょう。朝廷につきたい者は、朝廷についてもよいです。」

朝廷の命に背くことを恐れる武士の気持ちを汲んだ、北条政子の名言だ。あくまで悪いのは上皇ではなくその周りで上皇を動かしている人たちなのだ、その人たちを討つのだと、あくまで上皇が敵ではないことを示し、幕府側につく恐怖を和らげた。

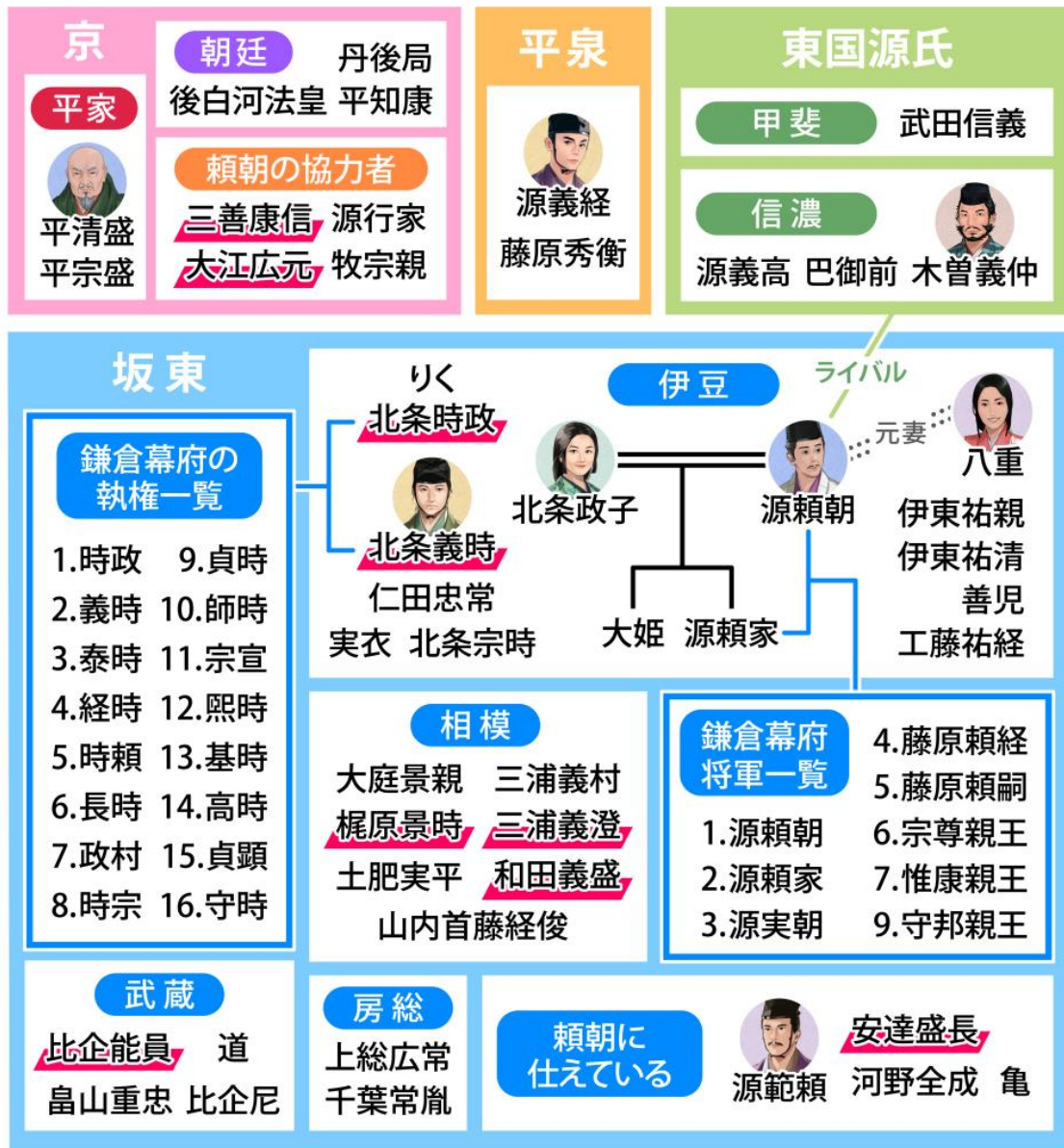
幕府と御家人が築いてきた絆を訴え、そして朝廷に歯向かう恐怖を和らげるこの言葉に、御家人は幕府につく決心をする。この当時、女性が武士を動かすのは困難であったにもかかわらず、北条政子は優れたリーダーシップを持っている。果たして日本三大悪女の一人と言えるのだろうか？

3-1. 政子の家系図との関連図

○家系図



○人物相関図



... 13人の合議制のメンバー

3-2. 政子が悪女とされた要因とその説得性の検討

① 亀の前事件

1177年頃に婚姻をした源頼朝と北条政子だが、1182年に2人目の子を懐妊する。ところが、源頼朝は亀の前(かめのまえ、生没年不詳)という

女性を寵愛するようになる。このことを知った北条政子は激怒。亀の前が住んでいた邸を打ち壊すとともに、亀の前を追い出してしまふ。当時は妾がいて多くの子供を設けるのが当たり前だったので、常軌を逸した行動であり、嫉妬深く気性の激しい奸婦のイメージを持たれる様になった。

○背景と解釈

当時の風習として、ある程度の立場を持つ公家や武家は一夫多妻が当たり前だった。源頼朝は源氏の嫡流として血筋も申し分なかったのに、妻妾を持つのは普通のことだった。北条政子の父・北条時政(ほうじょうときまさ)は一土豪の一人にすぎなかったが、複数の妻妾がいて多くの子供を設けていた。当時の公家や武家が妻妾を抱えていた目的の第一は、多くの子供を設け一族の勢力を維持・拡大することだったので、北条政子のとった行動は常識外れである。この一事をもって、強烈な嫉妬深さを印象付け、一族の繁栄を阻止した悪女と民衆には嫌悪感を持たれるようになった可能性があるが、政子の行動は夫を深く愛していた反動であろう。後継者候補の人数に影響したかもしれないが、そのことが政権の維持に深く影響したとは思われないので、これをもってして歴史的悪女とは言えないとの説があるが、その説は妥当と思われる。

②源範頼の幽閉、そして死

範頼は頼朝に臣従していた。それなのに頼朝の義弟・源範頼に謀叛の疑いがあると源頼朝に讒言し、結果、幽閉又は死に追いやったとされる。

年度	主な出来事
1176年	曾我兄弟の父・伊東祐泰が工藤祐経に誤って殺される。事件の発端は、伊豆にある工藤祐経(すけつね)の領地をめぐる、工藤祐経と曾我兄弟(伊藤祐泰の子、曾我家に養子に出された)の祖父・伊東祐親(すけちか)の所領争いに始まる。工藤祐経が伊東祐親を暗殺しようとしたが、かなわなかった。が、近くにいた伊東祐親の嫡子・伊東祐泰(すけやす、曾我兄弟の父)を誤って殺してしまう。当時幼かった曾我兄弟を連れて母親が曾我祐信と再婚する。

1193 年 5 月	<ul style="list-style-type: none"> ・15 日に源頼朝が富士野の御旅館に入り、16 日には富士野で狩りを催している。 ・28 日、曾我兄弟は富士野の神野の御旅館におしかけて工藤祐経を討った。 五郎（弟、時致）は將軍頼朝を目掛けて走り、頼朝はこれを迎え討とうと刀を取ったが、御家人・大友能直がこれを押し留めた。この間に時致は近習・御所五郎丸に取り押さえられ、大見小平次が預かることで事態が落ち着くこととなった。 ・5 月 28 日、曾我兄弟の仇討ちが起こり、頼朝が討たれたとの誤報が入ると、嘆く政子に対して範頼は「後にはそれがしが控えております」と述べた。 ・29 日に頼朝は五郎（弟）の尋問を行い、有力御家人らがそれに同席し、その他多くの者も群参した。尋問を終えた頼朝は五郎の勇姿から宥免（ゆうめん、大目に見て罪を軽くする）を提案するが、祐経の子である犬房丸の訴えにより同日梟首された。 範頼が政子に謀反を疑われるような言葉をかけたというのは『保暦間記』（ほうりやくかんき、作者不詳）にしか記されておらず、また曾我兄弟の事件と範頼が頼朝に出した起請文の間が二ヶ月も空いていることから、政子の虚言または陰謀であるとする説や、南北朝期（14 世紀）に成立した『保暦間記』は史料としての信頼性を疑いがあるとの説もある。
1193 年 8 月	<ul style="list-style-type: none"> ・2 日、政子の報告（範頼の言葉をそのまま伝えただけなのか、謀反の臭いをほのめかしたのかは不明）を受けた頼朝に謀反を疑われた範頼は、頼朝への忠誠を誓う起請文（きしょうもん、起請とは、神仏に呼びかけて、もし自己の言が偽りならば、神仏の罰を受けるべきことを誓約することをいい、これを記した文書。）を頼朝に送る。起請文（きしょうもん／神仏へ虚偽のないことを誓った文書）を捧げ、潔白と忠誠を切々と訴える。一読した頼朝は「源範頼」との署名に目を留め不適切（*3）だとケチをつけたものの、これを受け入れた。 ・10 日夜、範頼の家人である当麻太郎が、頼朝の寝所の下に潜む。気配を感じた頼朝は、結城朝光らに当麻を捕らえさせ、明朝に詰問を行うと当麻は「起請文の後に沙汰がなく、しきり

	<p>に嘆き悲しむ参州（範頼）のために、形勢を伺うべく参った。全く陰謀にあらず」と述べた。次いで、この常軌を逸した行動を範頼に問うと、範頼は覚悟の旨を述べたとある。これは当麻が範頼の命により行動し、陰謀を否定しなかったことになる。</p> <p>・17日、疑いを確信した頼朝は、範頼を伊豆国に流した（『吾妻鏡』による）。</p> <p>『吾妻鏡』ではその後の範頼については不明だが、『保暦間記』『北條九代記』などによると誅殺されたという。</p>
--	---

*3. 起請文の署名が不適切

起請文を読んだ頼朝は、「署名に源の文字が書かれているのは、一族として考えているのであろうか？それは身分不相応な考えである。起請文の内容が偽りであることを示している」として、範頼の使者に伝えるよう命じ、大江広元が、そのことを使者の大夫属重能に伝えると、重能は、「範頼は、故・源義朝殿の御子息です。頼朝様は御舎弟であることをご存じのはずです。頼朝様は、去る元暦元年(1184年)秋、範頼が平家討伐の代官として上洛した時には、『弟の範頼を九州に派遣する』ことを後白河法皇に奏聞しています。その内容は命令書にも載せられています。全く勝手に行ったわけではありません」と弁明したとのこと。それに対する頼朝の言葉はなかったが、重能の報告を受けた範頼は、あわてふためいたとか。

頼朝は兄妹としての扱いはしていなくて、家人だと思っているのに、一族のつもりで、鎌倉殿の後継者候補と思い上がっているのかというような思いかもしれないが、言いがかりのようでもある。頼朝の闇のように深い猜疑心の所為か？

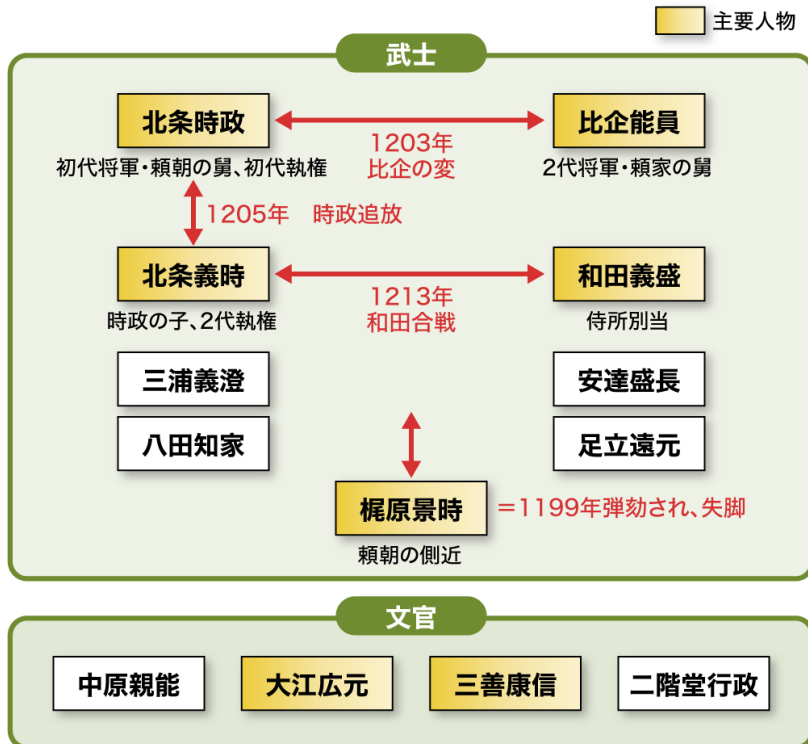
○範頼の言葉は、政子を慰めるためだったようにも解釈できる。しかし、慰めるのであれば、「非常事態なので全身全霊で頼家を支え、幕府の安泰に尽力しますので、ご安心ください。」であり、「自分が後継者になり、政権を維持するので、ご安心ください。」というのであればいかにもまずい。範頼の意図もそこにあって、政子もそのように解釈したのであろうか。もしも範頼が言葉足らずであることを理解しながら、政子があえて頼朝に伝えたとしたら讒言となるが、そうではなかろう。

	<ul style="list-style-type: none"> ・足立景盛（宿老・足立盛長の子）が三河に出立後、わずか4日後に頼家が景盛の愛妾を拉致し、囲った。（『吾妻鏡』によれば、安達景盛の愛妾を見そめた頼家は、配下の御家人に命じて景盛の屋敷から愛妾を拉致させたことになっている。若気の至りゆえの暴走は実際にあったのだろうが、『吾妻鏡』が話を盛っている可能性もあるとの説もある。） ・4月に若い頼家の失政を理由に政務が停止され、十三人の合議制(*4)が置かれると景時もこれに列した。 ・8日後には比企時員ら8人の側近について「鎌倉で彼らにたとえ狼藉があっても敵対してはならない。もしこの命令に背く者があれば罰する」という常軌を逸した命令を出した。
1200年	<p>頼家の乳母夫（比企能員とともに）で腹心の梶原景時が自らの讒言がもとで、66名の御家人に弾劾され、その結果、鎌倉を追放されて討たれる。</p> <p>頼朝に重用されていたが、讒言壁があり、御家人仲間からは嫌われていた。</p> <p>慈円は『愚管抄』で、景時を死なせたことは頼家の失策であると評した。</p>
1202年	<p>頼家、従二位に叙され、征夷大將軍に宣下される。</p>
1203年	<ul style="list-style-type: none"> ・5月、頼家は千幡（実朝）の乳母・阿波局（政子の妹）の夫で叔父である阿野全成（あのぜんじょう、源義朝の七男）を謀反人の咎で逮捕、殺害した。さらに阿波局を逮捕しようとしたが、政子が引き渡しを拒否する。 ・7月半ば、頼家が急病を発し、8月には重篤になった。 ・8月27日、時政は政子と謀って「もし頼家が亡くなったら、諸国の地頭職を頼家の長男・一幡と頼朝の二男・実朝（千幡）に分譲する」案を出した。 ・北条時政と北条政子の陰謀を知った比企能員は、危篤状態を脱した源頼家にこのことを通報。頼家は自らの立場を危うくする北条時政と北条政子に激怒し、比企能員に北条氏討伐を命じる。 ・この密議を盗み聞きしていた北条政子は、北条時政に通報。（？大いに疑問あり）

	<p>1. 9月2日、北条時政は、比企能員を自邸に招く。源頼家との密議が露見していることを知らない比企能員は、北条時政邸に出向き、そこで討たれてしまう。（比企能員の変）さらに、北条時政は比企氏一族を滅ぼすとともに、北条政子にとって孫にあたる一幡も討伐してしまう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・9月7日の朝に幕府の使者が京都に到着し「9月1日に頼家が病死したこと、頼家の弟・千幡を将軍に任命してほしい」ことを告げた（同時代の貴族・近衛家実（このえいえざね）の日記『猪隈関白記（いのくまかんぱくき）』）。頼家は存命中だった。 ・孤立した頼家は政子により出家させられ、伊豆・修善寺に幽閉される。 ・11月になって、逃げていた一幡が捕らえられ、北条義時の手勢に刺し殺されたとされる。
1204年	<ul style="list-style-type: none"> ・7月18日、頼家、北条の討手によって暗殺される。享年23。

*4. 十三人の合議制

13人の合議制メンバー



頼家が訴訟を直接に裁断することが禁じられ、有力者 13 人の合議により決定されることになった。表向きは、若い将軍・頼家を補佐するということであったが、実際には独自に振る舞おうとする頼家への抑制であった。

『吾妻鏡』には頼家が従来の慣例を無視して恣意的判断を行ったという挿話が並べられている。頼家を立てることで政治を主導しようとする頼朝側近（大江広元・中原親能・梶原景時）に対する他の有力御家人の不満・反発も要因とされている。

○頼家の問題点

・政治的後見人は梶原景時と比企能員であったが、両名共失ってしまった。梶原景時が弾劾されたとき、手の打ちようもあつたはずである。失策である。

・頼朝以来の有力御家人であった安達盛長の嫡男・景盛の愛妾を奪うという言語道断の行為に出た。

・13 人の合議制に反発して、それが組まれた 8 日後には自分が重用していた小笠原長経・比企時員（ときかず）・中野能成（よしなり）など 8 人の側近について「鎌倉で彼らにたとえ狼藉があつても敵対してはならない。もしこの命令に背く者があれば罰する」という命令を出した。常軌を逸した頼家の反発に誰もが驚き、信頼を失くす要因となった。

・頼家は権勢を振るい始めた祖父・時政の率いる北条一族を嫌い、これに対抗できる存在として妻妾・若狭局の父・比企能員一族を重用するようになった。

○北条政子の対応

源頼朝は代々の家人がいたわけでは無い。主に関東の御家人に担がれて、将軍に就任した。頼家は経緯をよく承知していなくて、2 代目の悪いところを晒すことになった。後見人の梶原景時と比企能員を失ったことも頼家の言動に大きく影響していたのだろう。そのようなことで頼家は御家人の信頼を失い、北条時政の反発を買っていた。この状況下で頼家が急病になり、重篤化した時、政子は頼家が回復する見込みがないだろうと思い、頼朝の創設した鎌倉幕府を守るため、やむを得ず鎌倉殿を交代させる決心をして、北条時政にライバルの比企能員の謀殺と一族を抹殺させた。孫の一番の暗殺も黙認したのだろう。

比企能員は何の疑いもなく、北条邸に招待され、謀殺されている。それにほぼ同時に政子は京都に頼朝の死亡を報告し、実朝に将軍職を交代させることを願ひ出た。これらより、頼家が比企能員の報告を聞いて、北条一族討伐を命令したのをたまたま政子が盗み聞きしたことはあり得ない。後世の人も誰も信じてい

ないことを『吾妻鏡』には書いている。政子と北条一族を正当化するための方便であろう。

そして思いがけず頼家が回復したが、すでに京に死亡届を出して実朝の將軍職就任を願い出ているので、頼家を出家させて、鎌倉殿を実朝に交代させて、頼家を伊豆に幽閉した。翌年になりやむを得ず、北条一族による頼家の暗殺を黙認したのであろう。史料には無いが幽閉先での頼家の反省の無い言動なども影響したのかもしれない。それに頼家を生かしておけば、いずれ政子や北条一族の謀議が明るみに出るので都合が悪かったのだろう。

④実朝

年度	主な出来事
1192年	鎌倉で生まれる。幼名は千幡。乳母は母・政子の妹・阿波局（あわのつぼね）・大弐局（だいにのつぼね）ら御所女房が介添する。
1203年	「比企能員の変」により兄・頼家は將軍職を失い、伊豆国に追われる。母の政子らは朝廷に対して9月1日に頼家が死去したという虚偽の報告を行い、千幡への家督継承の許可を求めた。これを受けた朝廷は7日に千幡を従五位下・征夷大將軍に補任。
1204年	<ul style="list-style-type: none"> ・兄・頼家が北条氏の刺客により暗殺される。 ・京より後鳥羽上皇の寵臣・坊門信清の娘であり、後鳥羽上皇の従妹にあたる信子を正室に迎える。 (『吾妻鏡』には、正室ははじめ足利吉兼の娘が考えられていたが、実朝は許容せず使者を京に発し妻を求めたとある。)
1205年	<ul style="list-style-type: none"> ・実朝は北条時政邸にいたが、時政と継室・牧の方は密かに実朝暗殺計画（*5）を練るがこれが発覚。実朝は政子の命を受けた御家人らに守られ、義時の邸宅に逃れる。時政は兵を集めるが、兵はすべて実朝のいる義時邸に参じた。時政は修善寺に追われ、時政の息子で政子の弟・義時が執権職を継承する。
1207年	実朝、従四位上に叙せられる。
1208年	実朝、疱瘡を患う。
1209年	<ul style="list-style-type: none"> ・実朝、従三位に叙せられ、さらに右近衛中将に任ぜられる。 ・実朝、和歌30首の評を藤原定家に請う。

	<ul style="list-style-type: none"> ・義時が郎従の中で功のある者を侍に準ずることを望む（自分の郎党だけを特別扱い）。実朝は許容せず、「然る如きの輩、子孫の時に及び定めて以往の由緒を忘れ、誤って幕府に参昇を企てんか。後難を招くべきの因縁なり。永く御免有るべからざる」と述べる。
1211 年	<ul style="list-style-type: none"> ・実朝、正三位に昇り、また美作権守を兼ねる。 ・実朝の猶子に迎えていた頼家の息子・善哉は出家して公卿と号し、受戒のため上洛した。
1212 年	<ul style="list-style-type: none"> ・侍所において宿直の御家人が鬪乱を起こし、2名の死者が出る。7月2日、実朝は侍所の破却と新造を望み、不要との声を許容せず、千葉成胤に造進を命じる。 ・実朝、従二位に昇る ・この頃しばしば幕府において歌会を催し、御家人との結びつきを固める。特にしばしば義時の長男・泰時が伺候していることが注目される。
1213 年	<ul style="list-style-type: none"> ・御家人らの謀反が露頭する。頼家の遺児を将軍とし、義時を討とうという企てであり、加わった者が捕らえられる（泉親衡の乱）。その中には侍所別当を務める和田義盛の子である義直と義重らもあった。 ・実朝、正式位に昇る ・和田義盛が御所に参じ対面する。実朝は義盛の功労を考え、義直と義重の罪を許した。 ・義盛は一族を率いて再び御所に参じ、甥である胤長の許しを請うが、実朝は胤長が張本として許容せず、それを伝えた北条義時は和田一族の前に面縛した胤長を晒した。 ・義盛の謀反が聞こえ始め、ついに兵を挙げる。 ・義盛は討たれ、合戦は終わった。5日、実朝は御所に戻ると、侍所別当の後任に義時を任じ、その他の勲功の賞も行った（和田合戦）。
1216 年	<ul style="list-style-type: none"> ・実朝、権中納言に任ぜられ、7月21日、左近衛中将を兼ねる。 ・実朝の昇進の早さを憂慮し、北条義時と大江広元が密談した。 ・大江広元が実朝に「将を兼ね給うべきか」と諫めた。実朝は「諫めの趣もつともといえども、源氏の正統この時に縮ま

	<p>り、子孫はこれを継ぐべからず。しかればあくまで官職を帯し、家名を挙げんと欲す」と答える。広元は再び是非をいわずに退出し、それを義時に伝えた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実朝が、前世の居所と信じる宋の医王山を拝すために渡宋を思い立ち、陳和卿（東大寺大仏の再建を行った宋人の僧）に唐船の建造を命じる。義時と広元はしきりにそれを諫めたが、実朝は受け入れなかった。
1207 年	<ul style="list-style-type: none"> ・完成した唐船を由比ガ浜から海に向かって曳かせるが、唐船は浮かばず、そのまま砂浜に朽ち損じた。 ・園城寺で学んでいた頼家の子・公卿（くぎょう）が鎌倉に帰着し、政子の命により鶴岡八幡宮の別当に就く。
1218 年	<ul style="list-style-type: none"> ・実朝、権大納言に任じられる ・病気がちな実朝の平癒を願って政子が熊野を参詣する。政子は京で後鳥羽上皇の乳母の卿局（きょうのつぼね、藤原兼子）と対面したが、『愚管抄』によればこの際に実朝の後継として後鳥羽上皇の皇子を東下させることを政子が卿局に相談した。 ・3月16日、実朝が左近衛大将（さこんえのだいしょう）と左馬寮御監（さめりょうごけん）を兼ねる。10月9日、内大臣を兼ね、12月2日、九条良輔の薨去（ほうきょ）により右大臣へ転ずる。武士としては初めての右大臣であった。
1219 年	<ul style="list-style-type: none"> ・1月27日、雪が2尺ほど積もる日に八幡宮拝賀を迎えた。夜になり神拝を終え退出の最中、「親の敵はかく討つぞ」と叫ぶ公暁に襲われ、実朝は落命した。享年28（満26歳没）。 ・公暁は次に源仲章（みなもとのなかあきら）を斬り殺したが、『愚管抄』によるとこれは北条義時と誤ったものだという。『吾妻鏡』によれば、義時は御所を発し八幡宮の楼門に至ると体調の不良を訴え、太刀持ちを仲章に譲ったとある。 ・公暁は実朝の首を持って雪の下北谷の後見者・備中阿闍梨宅に戻り、食事の間も実朝の首を離さず、乳母夫の三浦義村に使いを出し、「今こそ我は東国の大將軍である。その準備をせよ」と言い送った。義村は「迎えの使者を送ります」と偽り、北条義時にこの事を告げた。義時は躊躇なく公暁を誅

	<p>殺すべく評議をし、義村は勇猛な公暁を討つべく長尾定景を差し向けた。</p> <p>・公暁は義村の迎えが来ないので、1人雪の中を鶴岡後面の山を登り、義村宅に向かう途中で討手に遭遇する。討ち手を斬り散らしつつ義村宅の板塀までたどり着き、塀を乗り越えようとした所を討ち取られた。享年 20。</p>
1226 年	<p>頼経（よりつね、源頼朝の同母妹・坊門姫の曾孫）、将軍宣下により鎌倉幕府の 4 代将軍となる。</p>

*5. 実朝暗殺計画

<p>北条時政と継室・牧の方が将軍源実朝を亡きものにして、娘婿の平賀朝雅（ひらがともまさ）を将軍に据えようとしているとの噂が流れていた。朝雅は清和源氏の流れで、頼朝の猶子（仮に結ぶ親子関係の子の称）となっていた。</p>
--

○実朝の問題点

- ・政務を顧みず、公家風を好み、和歌に熱中し、『金塊和歌集』の編纂に力を入れた。
- ・実朝は次第に都の公家文化に親しみを覚えるようになり、公家の坊門信清の娘を正室に迎え、和歌に熱中するようになった。
- ・前世ゆかりの宋・医王寺を訪れることを思い立ち、周囲の反対を押し切って、僧・陳に唐船建造を命じた。1217 年、船は完成し、海に曳き出されるが、しかし浮かぶことはなく、実朝の渡宋の夢も潰える。

4. 謎

- ・曾我五郎はなにゆえ、頼朝を討とうとしたのか？
- ・実朝が政務を顧みようとせず、和歌に熱中したのは、兄・頼家の轍を踏まないためか？それとも理屈抜きに好きだったからか？史料が無いのでわからない。
- ・公卿は実朝に向かったとき、何故「親の仇」と叫んだのか。そして、公卿を唆した黒幕は誰か？

実朝暗殺後、公卿は乳母子（めのとご、乳母の子）・弥源太を三浦義村邸に遣わし、「今、将軍の席が空いた。次は自分が将軍となる順番だから、早く方策を考えよと指示したとある。仇を討つという大義名分で、自らが将軍になるための暗殺か。

頼家暗殺時、実朝は12歳だった。頼家殺を命令する、ということは考えられない。その様に信じ込ませる黒幕いたのではないかとされているが、謎のままである。義時は御所を発し八幡宮の楼門に至ると体調の不良を訴え、太刀持ちを仲章に譲ったとある。義時は公卿の暗殺を事前に知っていたのではないかと思わせるようで、いかにも怪しい。義時と政子の黒幕説があるが、しかし実朝を暗殺する理由が見当たらないともいわれている。

公卿が、暗殺後に三浦義村に使いを出し、三浦邸に行こうとしていたので、三浦義村も怪しいが、このようなやり方で実朝を暗殺してもクーデターが成功しないのは承知していたはずだろうし、黒幕ではなかろう。いずれにしても実朝が事件の背景について何も語らないまま、討ち手に討ち取られてしまったので、謎のままである。

・政子は我が子頼家と実朝の死に、どの程度関与したのだろうか？

謎のままである。

5. さいごに

後鳥羽上皇を島流しにしたのは、鎌倉幕府側にもそれなりの正義があり、政子側からは鎌倉幕府を守るためにはやむを得なかったはずだし、妥協は出来なかっただろう。悪女の要因とは言えないだろう。我が子・頼家、そして実朝の死に、政子がどの程度関与したのかは謎であるが、関与していたとしても、夫・頼朝が創設した武士の政権・鎌倉幕府を守るためであり、実家北条を優先したのでもなければ、権力欲にかられて、尼將軍として権力の座に就いたのでもなさそうである。おそらく、日本三大悪女の一人でもなく、日本歴代悪女十傑にも入らないだろう。類稀な嫉妬心の持ち主であることは間違いなからう。

参考資料

- ・NHK ザ・プロファイラー「北条政子 武士の世をひらいた女性」
- ・江宮 隆之氏の史料
- ・ウィキペディア

以上